

第 120 有田国際陶磁展
美術工芸品・オブジェ部門 審査評

審査長 大長 智広

私たちはみなコロナ禍という困難な数年間を経験しました。ようやく世の中が日常を取り戻し、様々な行事が開催され、生活の中に笑顔があふれるようになってきました。そしてここ有田でも 120 回目を数える有田国際陶磁展が大々的に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。

今回の美術工芸品・オブジェ部門には、前回展よりも若干増えて、105 名・109 点の力作をご出品いただいております。また、外国籍の 7 名からも 7 点の作品をご出品いただいたことは、国際陶磁展としての本公募展の性格が少しずつ世間に知られていった結果であり、開催にかかわられた皆様の努力に敬意を表します。

本部門の審査には日展会員の西本直文氏、日本工芸会正会員の望月集氏、そして大長の三名が当たりました。第一次審査で審査員が各 30 点の作品を選びました。その集計により 52 点の作品がまず入選となり、その後、例年の入選点数の基準である 70 点をめどに各審査員が追加で 10 点ずつ作品を選びました。その結果、22 点が新しく入選候補に加わりましたが、審査員同士でじっくりと作品を 1 点 1 点検討していったところ、入選のレベルには達していないと思われる作品を選外として、最終的に 70 点が入選することになりました。入選作は審査員のバックグラウンドの多様性がそのまま反映されたようなバラエティ豊かな作品群であり、技術的な完成度、作者の表現における意図や目的、作品としての質などとのバランスが取れた優品ばかりです。もちろん、中にはまだ粗削りな作品も含まれています。これらは作者が制作にあたって挑戦した課題に対する将来性を評価して入選としたものになります。いずれにしても 120 回という記念すべき展覧会にふさわしい作品群だといえるでしょう。

さて、第一席の文部科学大臣賞を受賞された奥川真以子さんの《Maron Fleur 24-02》は三組の作品です。他の受賞作に比べて小品ではありますが、丁寧な轆轤仕事、器形内外の掛け分けによる色彩の対比、そして何よりも轆轤成形後に変形させることで三点が集合したときに生まれる、流れるような凜としたリズムが、この国際陶磁展を今後、次のレベルへと誘ってくれる、まさに 120 回という記念展にふさわしいさわやかな印象を与える優品だといえます。

第二席の佐賀県知事賞を受賞された川崎精一さんの《月下美人陰刻鉢》は伸びやかな轆轤成形による鉢に陰刻による花模様が施された作品です。陰刻によって、青白磁の釉薬に濃淡が付き、深い淡い水色と模様部分の白さ、その間の階調とが一体となることで瑞々しさを見るものに感じさせてくれます。同時に、釉薬の透明感が水面に花が咲き誇る様を情感豊かに表しています。

有田町長賞を受賞した丸田巧さんの《WAVE 2024》はアメリカの地層浸食の風景を形象化した作品です。轆轤で成形した造形を素直に立ちあがらせることで生まれる輪郭線と吹き付けによる色調の変化が雄大で神秘的な大地のイメージを喚起させてくれます。

そして有田商工会議所会頭賞を受賞した中尾純さんの《釉象嵌花器》は轆轤で成形後に器形外面にかすかに膨らみが連なるように段をつけた作品です。マット調の釉薬に対して、光沢がある釉薬を放射状に象嵌することで、静かな中にどこまでも透き通った清廉な感覚が広がっていくような、磁器ならではの作品だといえます。

ここには記しておりませんが、受賞した 15 点はいずれも有田国際陶磁展の名にふさわしい作品ばかりです。時に審査員同士で意見を戦わせながら受賞・入選作を選んでいったことから、今回の審査は長時間にわたるものとなりましたが、これらの作品群を前に、陶磁器の持つ豊かな歴史や文化、さらには現代に生きる作家たちの新鮮な想像力を来館者の方に感じていただくことで、この公募展がさらに発展していくことを願っています。

審査員名簿

美術工芸品・オブジェ部門

(50音順・敬称略)

氏 名	所 属	備 考		推薦者
ダイチョウ トモヒロ 大長 智広	京都国立近代美術館 主任研究員	評論家	京都市左京区	今泉今右衛門
ニシモト ナオフミ 西本 直文	日展 会員	日展会員	広島県広島市	馬場九洲夫
モチヅキ シュウ 望月 集	日本工芸会 正会員	日本工芸会	東京都中野区	今泉今右衛門